

新譜

●レコード ●CD
●ビジュアル・ソフト

REVIEW

■二人のI・V・Oとその周辺

二人のI・V・Oとは、ブラジルのイーボ・ベルマン（E）と、ブルガリアのイヴォ・パバソフ（I）のこと（どっちもI・V・Oなんだがレコード会社の表記は分れているという点）。ブルガリアのI・V・Oはイーフォというのが近いらしい。どちらも国内CDが発売になっている。ブルガリアのI・V・Oの[Orpheus Ascending] (MIDI Inc.)の方は、よく最近知ったばかり。彼は、ブルガリアン・ウエディング・バンドを率いている。これが今年のメーリス・ニュージャズ祭に出演して今回ずいーの好評を博したそう。副島輝人氏によるメーリス・ニュージャズ批評（三二二頁）をこらんだきたいが、これは本当にすまじい演奏。クラ、サクソ、アコーディオン、ギター、ベース、ドラムス、歌の七人編成からして何かときめかせるが、これが裏拍子でガンガンあばれまわるからたまらない。ガムランでスゴイ複雑な拍子をものともせず、ドキッとさせるくらいモダンなヴァリエーションをかせるのをきいたことがあるが、あれくらいのショックを約束する新鮮な音楽だ。高田みどり（P&W）と佐藤九郎による「ルナ・クルーズ」中のトルコの裏拍子というのもすこかったが、ウエディング・バンドはナマナマしさがダイレクトに伝わってくる。ウエディング・バンドの緩な民族色濃い旋律で思いつくのが、九月に来日した南フランス出身の



【イーボ/イーボ・ベルマン (Pavle Wheel/キング CD)】

ルイ・スクラヴィス（五三年生れ）が演奏した一曲。バルカン・スラヴ辺りの民族音楽を連想させる旋律と拍があった。地中海的文化圏の形質があると自ら分析するが、地中海といえは古くから東西交易のネットワークが発達した地域である。スクラヴィスの生れ育った周辺には、さまざまなダンス音楽があったという。ラテン系の音

楽、たとえばタンゴなどが自分の中に記憶されていて我ながら驚いていると笑う彼は、タンゴのフレームを素材にした新鮮なスクラヴィス流ジャズ・サウンドもきかせてくれたものだった。

ブラジル出身（一九六一年生れ）の若者、イーボ・ベルマンの初アルバム「I・V・O」（キング）は上写真では、五曲でブラジルのわらべ歌が素材になっていた。冒頭の曲など一回耳にしたらだけで覚えてしまう親しみやすさ。アルバート・アイラーやガトー・バルビエリが引き合いに出されて語られているらしいが、ブラジルのI・V・O君は、トーンは明朗。へたすると歌のお兄さんのわらべ歌と、とられかねない、アイディア先行のアルバムという感もあるが、即断は控えよう。わらべ歌や民謡といった年輪を経た音楽は、たとえそれが歌のお兄さん、ひばり児童合唱団あたりが西洋オーケストラ伴奏で歌ったものでもなぜか捨てておけない吸引力が留保される。この辺に注目した動向はすでに、ジャズだけに限らず音楽全般にあらわれているようである。（副島）